

校長室だより
NO. 59
令和2年3月24日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高 須 亮 平

令和元年度の教育活動を振り返る

～「信じよう わたしのやればできる力」の成果

令和元年度の学年末は、新型コロナウイルス感染予防のため、3月2日（月）から休校が始まり、本日24日（火）の修了式は市内全小中学校で中止となりました。本来であれば、修了式は、全校が体育館に集まって修了証書を渡したり、1年の成果を私から子どもたちに話したり、また各学級でお別れ会などを行ったりするところですが叶わないこととなりました。その代わりに、学級担任が個別に通知表を渡したり次年度の連絡をしたりすることとなりました。学校としては、最後のまとめや次年度の橋渡しがきちんとできないことがたいへん残念に思っています。保護者の皆さまには、いろいろな面でご協力をいただき感謝しています。しかし、前号でお知らせしたとおり、卒業式については縮小・縮減されましたが、学校・学区が卒業生一人一人のことを考えた、すばらしい感動ある式にすることができました。そのことは、今年度の大きな喜びの1つとなっています。

今回は、今年度最後ですので、1年を振り返り、その成果を確認したいと思います。今年度のテーマは「信じよう わたしのやればできる力」として、校舎に看板を掲示して教育活動に取り組んできました。そのような中で、子どもたちは「やればできる力」について次のようなことを行い、語ってくれました。

- 運動会の組立体操で互いを思いやって練習し心が一つになった瞬間を感じることができた。
- 部活動で苦しいとき、友と「これだけ練習したから必ず願いは叶うよ。がんばろう」と声を掛け合うことができた。
- やれ検で目標を目指して何度も繰り返し努力してがんばることができた。



5・6年 組立体操

これらは、信頼できる友達や先生、家族などのかかわりを大切にしてきたからこそそのことであり、また、自分自身の素直な前向きな気持ちを生かすことができていたからとも考えられます。それが、それぞれの目標に向けてあきらめない強い気持ちとなり、自分を改善する原動力となっていました。まさに自分の信じる「私のやればできる力」の正体と思います。このことは本校の校訓「めあてを高くできるまでやれ」にも通じますし、それぞれの子どもたちの梅園プライドの具体的な表現とも言えます。このことは、卒業式での「校長式辞」の内容でも触れましたが、これは教師や家族の支えあってのことと思います。それを基にして、子どもたち自身が実践を通して自らが学ぶことができました。その姿から、この1年、「私のやればできる力」を求めてきた教育価値を大いに感じています。



部活動 市球技大会

教師集団もこの1年を通して、それぞれの学級の目の前の一人一人の子どもの成長を願って、子どもらしさを生かして創意工夫を凝らした指導を行ってきました。そして、明らかな成果が見られてきました。次に、教師の指導記録の一部を紹介します。どれからも、子どもの成長の姿とともに、それを支える教師がうかがえます。

○ 5年の学級担任の指導記録より

子どもたちは思っていた以上の素直さをもって、4月に入ってすぐによいところをたくさん見つけることができました。しかし、幼さもたくさん目に付きました。どうしていったらよいのか悩むことも多かった1年でした。その中で、子どもたちのよい部分である優しさ、素直さは絶対消さずにやっていきたいと思いつつ、考えて動くことはがんばらせたいと思って指導に当たってきました。

学芸会を終えた山の学習の準備の頃から、子どもたちは自信を持ち始め、自分たちで考えようとなりました。班が決まり、準備の段階でそれぞれのリーダーが引っ張り、それに意見を出したり多少の言い争いもあったりしましたが、役割分担やスタンス決めを自分たちで行うことができました。その経験が生きて、自分たちで教え合い、火が付かないときでも教師に頼らず自分たちで工夫することができ、



5年 山の学習

とても成長を感じました。そこから音楽集会、なわとび大会、卒業を祝う会（中止）の取り組みや準備は、自分たちから動く姿が当たり前のように見られました。もちろんまだまだサポートは必要ですが、優しさと素直さに加えて頼もしくなってきたと思います。

○ 6年の学級担任の指導記録より

この1年間の子どもたちの成長は、多くの子に本当の意味での協調性が付いてきたということです。4月当初は、楽しいことばかりを考えて、一部の子が物を配ったり掃除をしたりしている一方で、一部の子はその行動にも気付かずに遊んでいました。それがこの1年で、誰もが進んで自分から行動できるようになりました。まわりのことを意識しながら相手のことを気遣いながら行動に取り組む姿勢からは、協調性が育ってきていることを強く感じました。

運動会でのバトンバスの練習、長なわの練習など、どんな行事にも「心一つに」を合言葉に取り組んできました。しかし、はじめは、一部の子どもが少しでも早く運動場へ行って練習しようとしている一方で、ぼちぼち自分のペースで外へ出てくる子がいました。そういうときは、「この姿が『心一つに』なのか」と、子どもたちと私、子どもたち同士で話し合うようにして、子どもの本心や私の思いを学級全員に伝えるようにしてきました。その結果、みんなで協力して、みんなで笑って、みんなで取り組むことができるようになった、すばらしい1年になったと思います。



6年 学級対抗リレー

○ 2年の学級担任の指導記録より

2年生は、自分たちでできることがいっぱいあって、少しの指示で動ける子ばかりでしたので、4月の頃はたくさんほめていました。しかし、実態が把握できると、少しずつ求めることが高くなり、1学期後半はほめることが少なくなり反省しました。夏休み中に考え直し、2学期の学芸会シーズンではほめることを意識して楽しい練習にしました。



2年 音楽集会

授業も毎回、子どもたちが笑えるように意識することにもつながりました。ほめることは、子どものやる気、根気を引き出すことができると改めて感じました。1学期初めに、テンションが上がると興奮して飛び跳ねて離席していた子が、離席せずに楽しめるようになったり、友達に嫌なことを言うてしまう子が、教師が入らなくても自分で「ごめんさい」が言えるようになったりと、それぞれの子が自分を少しずつ振り返るようになり、大きく成長しました。

全体では、「友達のために」「学級のために」と動ける子が増えてきました。休み時間には、仲良く遊べるように自分たちでルールを考えたり、掃除の時間に雑巾がけなどの順番を自分たちで考えたりして工夫して生活していました。中でも、困っている人を見つけたら、すぐに「手伝います」と声を掛けることができるようになりました。そのような子どもたちとの一体感を味わうことができ、とても楽しかったです。

○ 5年の学級担任の指導記録より

2つの研究授業を通して、授業づくりについて学び、その中で子どもたちの成長を感じることができました。授業づくりでは、「子どもたちの思いは何か」と「教師として子どもたちに何を学んでほしいか」を重要視しました。



5年 研究授業

教師として学んでほしいことを基にして考えた問いが、子どもたちから出てきたときは、とてもうれしかったです。しかし、多くは子どもたちの思いを尊重しすぎて自分が目指すところにほど遠くなるか、教師の思いが強すぎて子どもたちがついてこられないという状況でした。そのとき、その状況を改善するために、教材や発問を工夫していききましたので、その面白さをとても感じました。

また、ひとり調べごとに子どもたち一人一人と対話することによって、その子自身の考え方や考えの深まりを把握することができました。「大造じいさんとがん」の授業の後半には、子どもたちの考えや、その考えの説明の仕方に磨きがかかってきて、大きな成長を感じました。授業を通して、子どもたちと向き合い、子どもたちの力を伸ばそうと取り組めたことで、私自身もいろいろなことを学ぶことができた1年でした。

まず、初めの5年の学級担任の指導記録です。4月当初、子どもを捉えた教師は、そのよさを確認します。「素直さ」と「優しさ」です。それを大切にしつつ「考えて動く」ことができる子にしようという目標を立てました。特に、5年の行事のメインとも言える「学芸会」で自信を持ち始めた子どもを感じた教師は、それを「山の学習」の

活動に生かそうと試みました。その中では思うように行かないこともあったでしょう。しかし、子どもたちは、自分たちの力を信じて活動できるようになっていったことが文から分かります。それがいつの間にか当たり前のように感じる教師には、子どもの成長として「頼もしさ」をプラスして、そのよさを実感するのです。

2番目の6年の学級担任の指導記録です。4月当初、なかなか子どもの中に一体感が見られず、個々が思いのまま活動していたことを何とかしようとした教師は、「心一つに」を学級の合言葉として教育活動に取り組みました。そして、運動会のバトンパスの練習、なわとび大会の長なわの練習、事あるごとに学級の問題として取り上げ、それを真正面からの解決を図っていきました。時には、子どもたちに問題を投げかけ、熱く語る教師の姿もその文から垣間見ることができます。その結果、子どもたちは自ら、まわりのことを意識でき、相手のことを気遣えるようになっていきました。子どもたちは「心一つに」が真の意味へと感じられるようになったことが伝わってきます。

3番目の2年の学級担任の指導記録です。4月、子どものよさを生かすことを心がけながらも、子どものレベルアップを期待する余りに、指導を見直さざるを得ないことに気付く教師がいました。そこで、改めて「子どもをほめ、認める」ことの大切さに気付くのです。その指導方針は、授業を楽しく変え、子どものやる気と根気を引き出しました。そして、子どもを改めて見てみると、4月当初から成長する子どもの姿を見つかるのです。そこには、自分たちで気付いて考え、活動する子ども、まわりの人やことのために活動する子どもが目を見せかけていました。教師は、そんな子どもとともに歩んだこの1年を振り返り、教育の素晴らしさを感じるのです。

最後の5年の学級担任の指導記録です。ここには、毎日行っている授業をいかに子どもにとって意味のあるものにするかという問題意識を基に、授業改善を図ることを通して子どもを育てていこうとする、教育の王道に挑む教師がいます。そのために、ひたすら子どもの意識を探り、その意識に沿った授業を展開しようとしています。しかし、口で言うのは簡単ですが、そんなにうまくできるものではありません。でも、挑戦し続ける教師は、教材選定の大切さ、子どもへの発問を工夫することに面白さを感じていきました。それが、子どもの追究を深め、思いも寄らない域に達する子どもを捉えることとなりました。それはまさに授業の醍醐味を味わう教師なのです。

ここに4人の教師の指導記録を通して、今年度の子どもの成長の姿、またそれを支えた教師の営みを紹介しました。どれからも感じることは、冒頭で述べた「信じよう私のやればできる力」の具体を表しているということです。子どもはもちろん、教師においても、1つ1つの自らの目標を目指していくとき、何を頼りにするか、何を信じていくかといえば、それは自分の「やればできる力」ということに気付くのです。それは、本校の校訓にも「梅園プライド」の内容にも通ずるものと思います。

なお、本号をもちまして、この校長室だより「すべては光る」は最終号となります。この5年間、梅園小学校の子ども、教師、学区の様子を基に学校経営に生かしてきた営みをいろいろな形にして記述し、お知らせしてきました。ご愛読に感謝します。5年間で全307号の発行となりました。毎週続けて発行できたのは、まさに皆様方のおかげであり、梅園小学校の子どもたちの確かな成長があったからと思っています。皆さまのご理解とご協力に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。